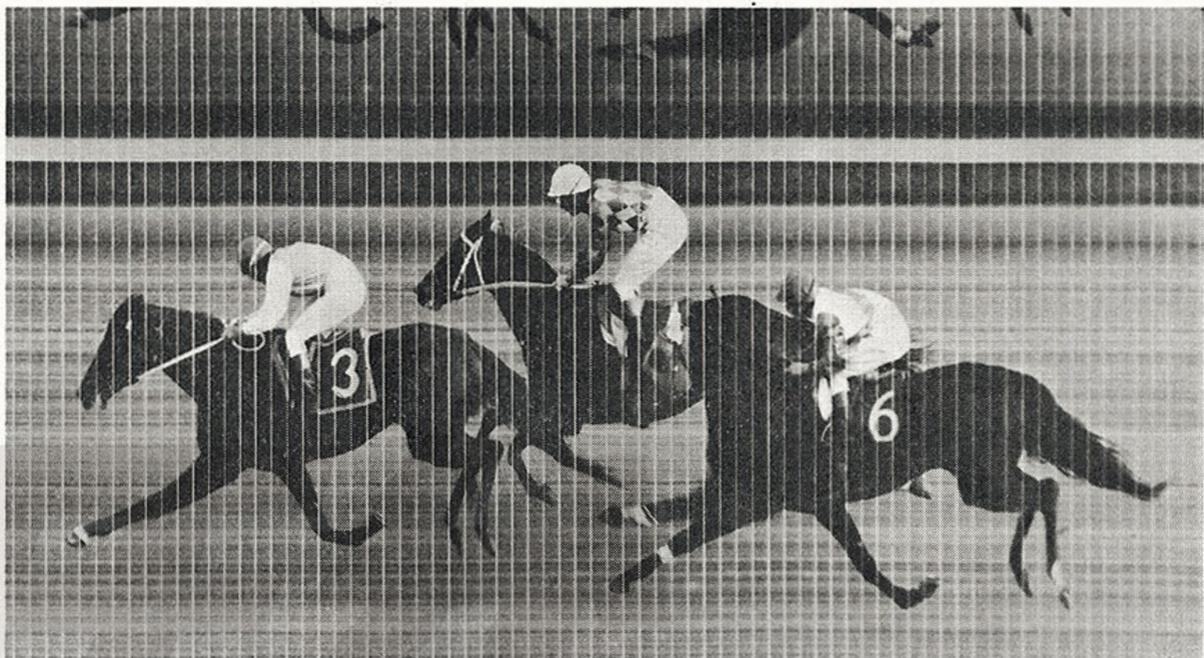


一騎打ち

寺山修司

有馬記念とその抒情



1

植字工のアルバイトの少年が、活字のケースから一つの活字を抜きとった。
3・5ミリ位の大きさの、馬という活字である。

「これが10ポイント活字か」
と少年は、その小さなおどろいた。おそらく、新聞活字よりも小さな活字である。少年は、テンポイントという馬が生まれたとき、馬主が「将来出世して新聞の、10ポイント活字で記事にのるような馬になるように」という願いをこめて10ポイント(テンポイント)と命名した」という記事を読んだことがある。

だから、10ポイント活字というのは、一面のトップ見出しにでもなるような大きな活字かと思っていたのだった。
「どんな未勝利馬だって、10ポイント活字

で印刷されることはできるだろうな」と、少年は思った。

あれから、三年。そのテンポイントが有馬記念に本命馬として出走している。その名は七倍の活字より大きく、ファンの目をひきつけた。

「デビューしたばかりの頃は、四五〇キロそこそこの小柄な馬だったのに、いまじゃ五〇〇キロを越すこともある。遅ましくなったもんだよ」

と、印刷所の親父さんは言う。「こんどこそは、トウショウボーイを敗かして、文字通りの日本一になってみせるだろうさ」

少年は、じぶんのジャンパーの中に今もかくし持っている10ポイントの「馬」という活字のことを思い出す。あの頃は、「自分だけの馬のように思っていたテンポイントだったが、今じゃ日本一の人気馬になってしまった」。そのことは、誇らしいというよりはむしろ、少年にとってさびしいことだったのである。

男は一生、ガラクタを引きずって歩く。そして、男の一生自体がガラクタであることを忘れようとするのである。

という、サローヤンの詩の一節が少年の心をとらえる。それにしても、テンポイントは本当に日本一の実力馬になったのだろうか？ 一抹の不安がないわけではない。さわってみると、10ポイントの活字の鉛のひんやりとした感触が指を刺すようだ。少年は、有馬記念発馬五分前の満員のスタンドの中で、白い息を吐きながら、なけなしのバイト料10万円で買ったテンポイントの単勝馬券をジャンパー

の中のもう一方の手でにぎりしめているのだった。

2

テンポイントの母のワカクモは、ほつれ毛の不運な女を思わせた。

ホステスの万里子は、その出生の秘密の記事を読んだことがある。ワカクモの母のクモワカは、セフトと星若の子で、名牝の誉れが高かったが、伝説を思っって薬殺を命ぜられた。

だが、愛馬を殺すにしのびなかった関係者たちは、「殺した」という報告書を出して、実はひそかにかくまっておいた。(母が家来に命じてわが子を殺させようとし、家来がその子をかくまっって育てたギリシャ悲劇の「オレステス」を思わせる話だが、実話なのだ) 殺されたことになっていたクモワカは、奇跡的に全快して、カパーラップ二世とのあいだに仔を産んだ。その仔が、ワカクモであった。

ワカクモは母の血をひいたすばらしい素質の持主だったので、関係者はこれを何とかデビューさせたいと思った。だが、すでに死亡届の出ている馬の仔を登録させるわけはない。ワカクモは、幽霊の仔として認知されることのできなかつた。それから、裁判がありクモワカ生存説が新聞を賑わし、ようやく登録されたワカクモは桜花賞をあざやかに勝つて母の報復を果たしたが、オークスでは惨めな敗け方をした。

やはり、幽霊の仔に大成をのぞむのは無理だったのか、と噂されながら引退したワカク

モの仔がテンポイントである。瘦身で、伏目がちの少年を思わせるテンポイントは、どこかひ弱さの感じられる馬で、クラシックを目ざして東上した皐月賞で、トウショウボーイにあっさり一敗して地にまみれてしまった。

「テンポイントを見ると、あたしは博ちゃんのことを思い出すのよ」と、万里子さんは言った。ゆきずりの客とのあいだにできた子が、父の認知を得られぬまま成長し、母の万里子さんを恨みながら家出していったのは四年前のクリスマス夜の夜だった。それ以来、万里子さんは酒びたりで、下手な賭博にまで手を出して借金だらけになり、テンポイントとワカクモの母子のドラマを勝手にわが身にひきつけて買いつづけてきたのであった。

「何が何でも、テンポイントに勝たせたいわ」
と言う万里子さんの心情は、もはやレースに賭けるといったものではなかった。「あたしは、あたし自身を買っただけ」

そう吹きながら満員のスタンドで息をつめて見守る万里子さんのうしろ姿は、こころなしかめつきりやつれたように見えた。

3

トウショウボーイが天皇賞で惨敗したのは一つの謎だった。それまで三着以下が一度もなかった馬が、直線でバツタリと走らなくなってしまった。

十三戦して十勝し、二着が二回、三着が一回。史上最強とまで言われたこの馬が、坂のあたりでずるずる後退するのを見たとき、フ

アンは「事故か」と思ったことだろう。

何しろ、四歳で有馬記念二五〇〇メートルを二分三十四秒〇でレコード勝ちし、古馬を一蹴した実力馬である。そのトウショウボーイの唯一の三着が菊花賞三〇〇〇メートルの長丁場のせいだったと主張してきたジャーナリストたちは、天皇賞三二〇〇メートルでの惨敗もまた血統のせいだったと分析した。

実際、その後の調教でも目を見はるようなタイムを出している。もし、天皇賞の一敗が三二〇〇メートルという距離のせいだけだったとするならば、今日の有馬記念の二五〇〇メートルは、すでに昨年レコード勝ちした距離であり、そこで当面の敵のテンポイントも破っているのだから、「敗ける訳が一つもない」ことになる。成績をみても、ことしになってからのトウショウボーイは宝塚記念、高松宮杯と二戦二勝し、四カ月休養したあと、オープンで一六〇〇メートルを一分三十三秒六という驚異的なレコードで勝っている。前回の天皇賞での謎の一敗さえなければ、この馬が有馬記念を制するのは、九十九パーセントまで確実視されたことだろう。

だが、あの一敗は？
と、競馬記者の三村は首をかしげていた。本当に、距離が原因なのだろうか？ それとも巨漢馬にありがちの持病の深管不安のせいなのではあるまいか？ もし、そうだとしたら62キロのハンデを背負って不良馬場の高松宮杯に勝ち、見習騎手の篠で一六〇〇メートルをレコード勝ちした、目に見えぬダメージが残っていて、それが右前深管をいためているというところも考えられる。
「万一、そんなことがあったら、今日のトウショウボーイは、二着どころかドン尻というところも考えられるかもしれない」

と、三村は思った。

思えば、トウショウボーイの経歴は、華麗なものであった。デビューする前から、テスコボーイとソシアルバスターフライの仔ということで期待され、デビュー戦で十八頭立ての十八番にもかかわらず一番人気を集めて逃げで楽勝。二戦目では連勝馬の芦毛のホウヨウシルバを先にいかせて直線をあっさりとかわしてしまっただけ。

三戦とも一番人気で楽勝し、四戦目で関西のナンバーワンといわれたテンポイントを迎え撃ったわけだが、これもほとんど問題にせぬ勝ちっぷりだった。
それまでのテンポイントが五戦とも一番人気で楽勝してきたことを考えると、トウショウボーイの強さは、ケタ外れのものだということがわかる。ジャーナリストたちは、トウショウボーイを「天馬」と呼び、「史上最強」とまで書きたてた。
だから、ダービーで圧倒的一番人気になりながら、クライムカイザーの二着に敗れたときも、「油断の一敗」と書きたてたりした。そして「トウショウボーイの実力が一頭ぬきんでていることは、だれ一人疑うものがなかったのである。」(実際、クライムカイザーはその後、トウショウボーイに挑んで神戸新聞杯でも、京都新聞杯でも、あっさり退けられていく。)

トウショウボーイとテンポイントとの対決

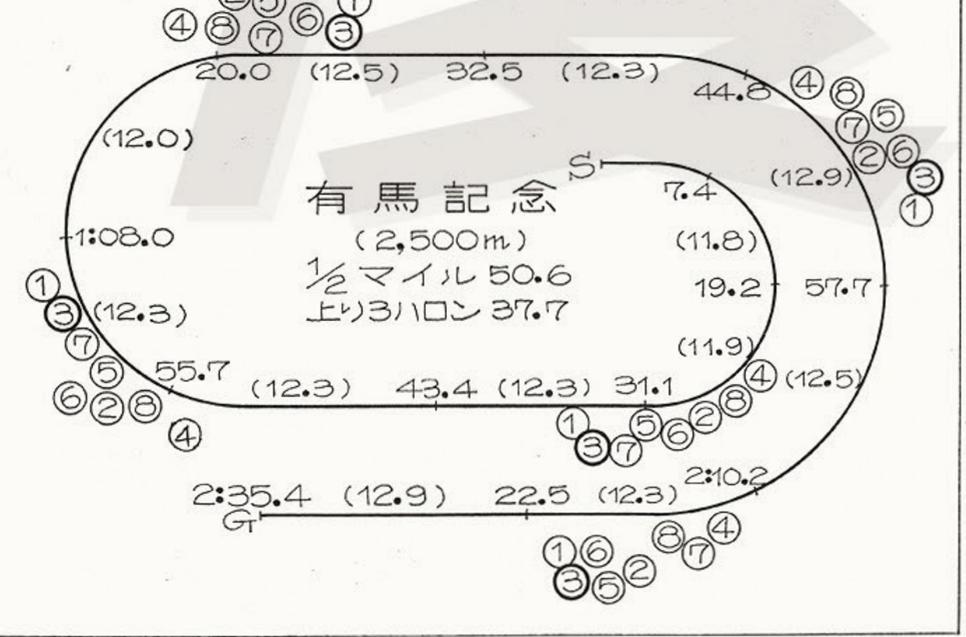
3467 12月18日 晴良 (52中5) 第6日 第9競走有馬記念 2,500米
発走15時10分

4歳以上	5歳以上	6歳以上	7歳以上	8歳以上	9歳以上
推せん	推せん	推せん	推せん	推せん	推せん
馬券	馬券	馬券	馬券	馬券	馬券
52,000,000円	21,000,000円	13,000,000円	7,800,000円	5,200,000円	
賞品	賞品	賞品	賞品	賞品	
295,400円	84,400円	42,200円			

番	馬名	性	年	月	日	厩舎	調教師	騎手	タイム	失点	得点	
3	★テンポイント	牡	5	6		鹿戸 明	高田 久成氏	小川 488	2:35.4	2141865	1165028	
1	トウショウボーイ	牡	5	6		武 邦彦	トウショウ産業株式会社	保田 510	2:35.5	1902600	1103893	
6	★グリーングラス	牡	5	6		嶋田 功	半沢吉四郎氏	中野 512	2:35.6	597064	459552	
5	プレストウ	牡	4	5		郷原 洋行	渡辺喜八郎氏	加藤 466	2:36.6	593948	535273	
2	トウフクセ	牡	5	6		宮田 仁	井上 芳春氏	大塚 476	2:37.2	83374	145366	
4	ジンストーム	牡	7	5		横山 富雄	株式会社アイ・ケイ	尾形 472	2:37.4	91025	194750	
7	スピリット	牡	5	6		中野 栄治	ローヤル株式会社	荒木 465	ク	アヤマ	64963	87264
8	メグロモガミ	牡	4	5		東 信二	門脇 登氏	境 452	ク	ハナ	169406	325260
										5644245	4016386	

連複式 (1-1)	— (1-7)	745305 (2-6)	576685 (3-6)	14685342 (4-7)	213613 (6-6)	—
(1-3) 38725560 (1-2)	1194838 (1-8)	3374345 (2-7)	195891 (3-7)	1214452 (4-8)	362824 (6-7)	428022
(1-3)	(2-2)	(2-8)	372874 (3-8)	5061377 (5-5)	(6-8)	1914869
(1-4)	1124095 (2-3)	1720859 (3-3)	(4-4)	(5-8)	6864506 (7-7)	—
(1-5)	10920251 (2-4)	230424 (3-4)	1896571 (4-5)	1109301 (5-7)	533683 (7-8)	350279
(1-6)	10341661 (2-5)	736921 (3-5)	16852526 (4-6)	590148 (5-8)	3133756 (8-8)	—
						計125470978

払戻金	単	200円	複	110円	110円	150円	連複	240円	売得金高	13,513,160,900円
-----	---	------	---	------	------	------	----	------	------	-----------------



「もう本物だ」と、ファンは言ったものだ。

今のテンポイントならトウショウボーイにも負けないだろう。五十二年六月のファン人気投票による宝塚記念レースにテンポイントが一番人気で出走し、休養あけ五カ月半ぶりのトウショウボーイは二番人気になった。だがゲートがあくとポンと出たトウショウボーイは(まさに翼をもった天馬のように)あっさりハナに立ち、他馬をよせつけるひ

まもなく二二〇〇メートルを逃げ切ってしまったのだ。

必死でこれをかわそうとするテンポイントにムチが加えられたが、〇秒一およばず、またしてもトウショウボーイに敗れたのである。その後、テンポイントは二戦二勝、一方のトウショウボーイも二戦二勝だったが、天皇賞でホクトボーイ以下に、謎の大敗を喫している。

距離と対戦成績をみても、あきらかにトウショウボーイが上位である。この謎の一敗をのぞけばトウショウボーイがテンポイントに敗れる理由は何一つない筈であった。

男はだれでも苦手というのをもっている。

そして泳げないものが海に魅かれるように、男はその苦手に魅きつけられつつけるのである。

とサローヤンは書いている。

「タカライジンとフジノオーの関係に似ているね」と、スシ屋の政が言った。

「テンポイントがタカライジンで、トウシヨウボーイがフジノオーだ」というのである。タカライジンは他の馬にはほとんど敗けたことがなかったが、どうしてもフジノオーにだけは勝てなかった。ところが、フジノオーは、いろんな馬に敗けた。タカライジンにあっさり一蹴された馬にも、接戦の末、敗れることがあった。

それでも中山大障害になると、タカライジンと一騎打ちをやって、必ずこれを葬ったのである。

「ということは、テンポイントはトウシヨウボーイには勝てないということかい？」

と訊くと、スシ屋の政はうなづいた。たぶん、この宿命の対決だけは、たとえトウシヨウボーイが跛になっても、テンポイントにだけは勝つような気がする———というのである。

パーテンの万田も、そう信じたい、と思った。たとえ理に叶わなくとも、そうであってほしいと思いたかったのだ。

だが、一年前とは状況が大きく変わっていた。前年にファン投票一位だったトウシヨウボーイは、ことは二位におちてテンポイントに王座をゆずっている。売れ行きも、前日発売で、一時は（生涯ではじめて）四位にまでおちている。一方のテンポイントは圧倒的に他を離しての一位。逞ましさも身につけ、体重も、中間調教では五〇〇キロを越えて菊

花賞のグリーングラス、有馬記念のトウシヨウボーイと互角、そして名実共に「日本」の座に一歩ふみこんでいる。

不運の名馬のイメージは、今やテンポイントからトウシヨウボーイにうつりつつあった。だがその理由はたった一つしかない。それはトウシヨウボーイが天皇賞で謎の惨敗をした、ということだけなのである。

「こうなったら意地でも人気にさからってトウシヨウボーイに賭けてやるぞ」と、パーテンの万田は思った。「大体、テンポイントはファンに愛されすぎるのだ。弱いと同情され、強くなると敬愛され……」

6

武邦彦の騎手生活の中でも、このトウシヨウボーイとテンポイントの二頭は微妙な役割を演じていた。

鹿戸明で連勝してきたテンポイントに、ダービーで乗り替ったのが武邦彦だった。そして武邦彦は、ダービーで七着と惨敗して再び鹿戸明に手綱を返すことになったのである。

前年、わずかに四勝しかしていない裏街道の鹿戸明に対し、つねに話題を集め花形ジョッキーの座をあゆんできた武邦彦である。

テンポイントを敗かしたいというのは男の意地でもあったことだろう。保田厩舎の主戦池上から手綱をもらって有馬記念でテンポイントの鹿戸明と対決し、これを破った。

以来、「テンポイントの鹿戸明にだけは敗けない」という意地を通してきて、今日の有馬記念である。このレースを最後に引退するというのもあって、武邦彦はどうしてもテ

た。馬場が重かったので、どの馬も馬場の中央を通り、内側が大きくあいた。天皇賞でトウシヨウボーイを深追いしすぎて、共倒れになったグリーングラスは、そのトウシヨウボーイを射程距離に入れて走り、そのすぐあとの位置をプレスストウコウがキープした。少なくとも最初の二ハロン位は先頭に立つと思われていたスピリットスワプスは、出番を失った脇役のようにしか見えなかった。やがて大きくあいた内を衝いてテンポイントが少しずつあがってくると、武邦彦はそれを待っていたようにトウシヨウボーイを内に寄せはじめた。

だが、私はトウシヨウボーイに賭けていた。私には「落ち目」愛好癖というのがあって、なぜか下り坂のものへの心の傾きをおさえることができないのだ。師走の空、風の中で、私はオーバーの襟を立ててスタンドの中にいた。そのポケットにはトウシヨウボーイの単勝が十万円。泣きたくなるような思いで「テンポイントだけに負けるなよ」と、つぶやきつつづけているのである。

7

ゲートがあくと、まずとび出したのは、スピリットスワプスではなく、トウシヨウボーイとテンポイントの二頭だった。スタンド前では、このレースが両馬の一騎打ちになるということが、誰の目にもあきらかになっ

ンポイントにだけは敗けたくない、と思っていた。世評ではテンポイントが上まわっていたが武邦彦はトウシヨウボーイがテンポイントに敗けるとは思っていなかったのである。

「どう乗っても、おれは勝つ」

と武邦彦は自負していた。レース五分前、武邦彦はちらりと鹿戸明の顔を見た。鹿戸明は、成績不振だが、なぜかテンポイントに乗ったときだけは別人のようだった。射手座生まれ。一発屋。その目には燐のように青い炎が燃えているようだった。

二人の唾がいた。

二人共、中年で黒いよれよれの外套を着ていた。

指話で話しながら、穴場に並んで立っていた。私は、そのすぐうしろに立って、馬券を買う順番を待っていた。二人の唾は仲良く並んだ穴場に手をさし入れた。だが、買った馬券はべつべつだった。一人はトウシヨウボーイ。もう一人はテンポイントだったのである。なけなしの貯金をおろして、年の瀬の有馬記念に本命馬を買うことを唯一のたのしみに行っている養老院の沢松じいさんは、ことしのためらわずテンポイントを買った。（このじいさんは、去年は一番人気のトウシヨウボーイを買ったということをおぼえているだろうか？）関西の鉄工所で仕事に失敗してクビになった吉武という男は、いま錦糸町でパーテンをやっていた。彼は関西から来た馬が敗れることだけに賭けつつけるファンだった。テンポイントなんかには勝たれてたまるか、と吉武は心の中で思っていた。何が何でも、トウシヨウボーイに勝ってもらわねば困るのだ。成績なんかどうでもいい。大衆の人気だけを信じた、と思っているのは、美保さん

トは共倒れになってしまおうだろう。そう思った矢先、テンポイントがずるずると下りはじめた。一瞬、トウシヨウボーイは単騎先頭に立った。トウシヨウボーイに一息入った。だが、テンポイントは力尽きたのではなかった。内から抜け出すのをあきらめ、一旦きけて外からの追い込み策をとったのだ。トウシヨウボーイが単騎で喝采に迎えられて四コーナーをまがろうとするとき、その外側からテンポイントが並びかけていった。一瞬の出来事だった。テンポイントが来ると、トウシヨウボーイはこれを離して再び先頭を奪った。だが、こんどはテンポイントにコースの不利はなかった。

二頭並んだまま直線に入ると、テンポイントがぐんぐん抜け出したのだ。トウシヨウボーイは、これを必死で迎え撃つかたちになった。武邦彦のムチがとんだ。だが、テンポイントの脚色の方が目立った。トウシヨウボーイに、昨年このレースでレコードを出したほどの牙えがないのか、それともテンポイントの報復の怨念の力がそれにあつたのか。怒涛のようなスタンドの歓声の中をテンポイントが一頭であざやかにゴール板前を通過していったのだ。

軽い目まいの中で、サローヤンの詩「ロック・ワグラム」の中の一節を思いうかべ、じぶんの体が急に軽くなってゆくように感じるのだった。

負けることを知るの、男のやさしさである。だが、それを受け入れたときから男はもう同じ場所には、いられなくなる。戸をあけて出てゆくほかほかなくなる。そして、外は今日もつめた風が吹いているのである……